

「2022年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学工学部1年 大橋寛明

ベトナムを訪れるまで、私のベトナムに対する印象は漠然としていた。ベトナムといえば、技能実習生を日本にたくさん送り込み、衣服の製造をしていて、コーヒーが名産の社会主義の国ということくらいしか、恥ずかしながら思い浮かばなかった。実際行ってみて、社会主義的な閉塞感はほぼなかったと言っていいだろうと思う。むしろ、これから発展していくという、未来を楽観する空気感が都市を覆っていた。押し返すバイクの波。ちょっと試してみたいと思い、Grabで予約したバイクタクシーに乗ってみた。運転手は信号をあまり守ってくれないし車間が狭すぎる。そこら中にあるバイクや車とちょっとぶつかって放り出されたら、轢かれるかもしれないと思いながら進んだ。ちょっと怖かったけれどすごく楽しむことができた。網目状の路地は、建物が張り出しているため空が見えないほどぎゅうぎゅうであった。そこには、所狭しと店が立ち並び、寝ている人や髪を切ってもらっている人、料理をしている人など、人々の生活を垣間見ることができた。混沌とした街全体に血液が行き届いている印象を受けた。死んでいっているように見える日本は大丈夫だろうかとも思ってしまった。

私たちのグループは戦争と平和教育というテーマで発表を行った。日本とベトナムは共に大きな戦争を経験しているが、かつての戦争や現在の平和の捉え方などにどのような違いが見られるのかを確かめることが目的である。ベトナムと日本の両国の学生を中心にアンケートを実施した。その結果の中で特に印象的だったものは、「国家間の争いを解決する手段として武力を許容するか」という質問に対し、日本では武力行使を容認する見方が大半だったのに対し、ベトナムでは武力を否定する見方が大勢を占めたということだ。日本は軍や交戦権を認めない平和憲法を掲げる国でありながら、一方軍隊を持つベトナムよりも武力行使に肯定的であった。これはベトナムでは戦争が比較的近い過去に起こったため、「生きた記憶」として悲惨な戦争の記憶が継承されているということに加え、日本では大規模な地上戦を伴う戦争の歴史が沖縄を除き少ないため、戦争を自分ごととして捉えない人がより多くいたためではないかと私たちは考えた。また、アメリカを退けたとき捕虜に対して残虐な行為を行わなかったことが誇りとしてあると、ホアロー刑務所でベトナムの学生言っていたように、ベトナム人は平和的な解決を求める傾向が強いとも感じた。この共同発表を通して、ベトナムの国の成り立ちや、ベトナム人の国に対する考え方を学ぶことができたと思う。ベトナムの歴史は「抵抗と革命の歴史」である。フランスにディエンビエンフーの戦いで勝ったことでベトナムという国が成立し、その後アメリカを退けたことで今の形の国家が成立した。そのため、ベトナム人の国家に対する帰属意識はとて高い。ベトナムのような国家の捉え方を持つ人と話したことはなかったので、そういう捉え方もあるのだと気付かされた。

海外の学生と直に話すことができた2週間はとて貴重だった。多くの時間と体験を共有できたことを本当に嬉しく思う。